

社会に貢献する金融仲介

リコー経済社会研究所所長
埼玉大学大学院客員教授

神 津 多可思



「持続可能な開発目標」(SDGs)という言葉は、日本でもすっかり人口に膾炙した。これは、2015年の国連の持続可能な開発サミットで採択されたものだが、17のゴールと169のターゲットがパッケージで採択されたというのは、ある意味、画期的なことだ。先の国際金融危機に対する反省という国際世論なくしてはできなかったことのように思えてならない。

SDGsというとすぐに地球温暖化防止と結び付けがちだが、その17のゴールの最初3つは「貧困をなくそう」、「飢餓をなくそう」、「全ての人に健康と福祉を」と並ぶ。それ以前からあった、グローバルな南北格差の是正という国連の問題意識がそのまま引き継がれたのであろう。他方、国際金融市場では、責任投資原則の文脈でESG投資がしきりに言われるようになった。言うまでもなく環境、社会、企業統治の英語の頭文字をとったこの考え方も、2000年代に入って出てきたもので、やはりそれ以前の行き過ぎた収益追求あるいは効率性至上主義への反動として出てきた面があると言えるだろう。

このようにSDGsとESGは、元々の出自は異なるが、金融市場では今や一つの大きなうねりを作り出している両輪の感があり、日本における